

出張報告

報告日 令和7年4月2日

会 派 名	柏崎の風
報告者氏名	柄澤均、春川敏浩、上森茜、阿部基
種 別	☒ 調査研究（ ☐ 行政視察） ☐ 研修会 ☐ 要請・陳情 ☐ 各種会議
用 務	石川県珠洲市 視察
日 時	令和7年3月30日（日）13:30～17:10
場 所 （会場）	石川県珠洲市宝立町周辺
調査項目等	1 能登半島地震の建物倒壊、津波被害状況及び復旧状況の把握 2 避難所及び仮設住宅の現状把握 3 被災住民の声の把握
概 要	■概要 珠洲市は石川県下で5番目の市であり、本州にある市の中で最も人口が少なく、12,979人であるとともに、65歳以上が人口比の50%以上を占めている。 主な特産品は珠洲焼、七輪、天然塩などがあり、能登半島の先端に位置する。 令和6年1月1日に発生した能登半島地震の震源地であり、震度7（M7.6）を記録するとともに、同年9月には、奥能登豪雨により、甚大な被害が発生した地域である。 ■主な質疑応答 ※質疑対応者 リブート珠洲 代表 篠原和彦氏 質問）地震発生から1年以上が経過しているが、建物の倒壊が多く見られる、復興に時間がかかっている様に思えるが、要因は何か、伺う。 回答）高齢化が進んでいる地域であったことから、空き家が多くあり、解体申請すら出されていない家が多くある。 冬季間は雪による二次災害などが発生する可能性があったため、市外の業者は作業を控えてもらっていた。 また、解体業者だけではなく、修繕や建て替えるための業者も少ないことが要因と考えられる。 質問）仮設住宅の現状を伺う。 回答）避難所は既に閉鎖されており、仮設住宅においては、基礎を打ち、2階建てのアパート風に建設されたものや主流である、プレハブ住宅、熊本モデルと呼ばれる仮設住宅の3種類があり、敷地や地域コミュニティに沿ったものがある。 また、最新の3Dプリンターによる住宅も建設されている。
	

【柄澤 均】

能登半島の最先端、震度7（M7.6）の地震の震源地である。南東側の宝立町では地震発生直後約4mの津波があり、同時に海岸の沈下が起こっている。北西側の大谷町では逆に海岸が隆起し海底が現れ、漁港の機能が失われていた。その後に発生した奥能登豪雨の被害も含めて被災地の現状は想像を絶するものであり、遅々として復旧が進んでいないことに、我々も大地震を二度受けた者として大きな疑問を抱く。避難所生活から仮設住宅への移行が進み、復興住宅の準備が進められていた。様々な仮設住宅の仕様があり、建設型応急仮設住宅の中には著名な建築家により設計され、そのまま利用されるものもある。近年の自然災害を受けた教訓からこうした仮設住宅の過ごしやすさ、使いやすさの進化が見られる。今後起こり得る災害に対してこうした住宅、トイレの進化、準備が間違いなく必要である。津波、土砂災害を想定した避難訓練も同様。また、空き家が手付かずになっている状況も見ることができた。災害という面からも空き家対策を進めることも考えたい。そして思うのは、自治体間の連携はもとより、国の支援は不可欠である。地元ガイドさんの「ゆっくりと復旧していきます。」という言葉が遅れている復旧に対して救いであった。一日も早い復旧・復興を願う。

【春川 敏浩】

能登半島地震発生から15か月が経過したが、今回視察した珠洲市は震源地である現状を見て改めて地震の恐ろしさと、豪雨被害による土石流被害が重なり目の当りにした光景はすさまじいものと痛感した。海岸部は地震と富山湾からの津波被害で家屋の倒壊、仁江町においては土石流による家屋の倒壊した地域であり、殆ど災害のままの現状であった。震災からの復興が極めて遅いのが気にかかる。理由を伺うと、金沢まで136kmと車で2時間30分を要し地形的にも人口減少が進んでいるのが大きな要因である。地域の方は、そんなに急いで復興しなくても時間をかけてもいいとのことである。海岸沿いにおいても、かなり隆起しており漁港としての利用が不能となっていた。道路復興整備、一般住宅の復旧作業の遅れが心配される。地域住民が果たして珠洲市に戻って来るのか行政の対応が気にかかる。柏崎市の中越地震や中越沖地震での復興は極めて速かったと思う。国からの支援策を望む。

【上森 茜】

令和6年元旦に発生した能登半島地震の震源地、また同年9月に奥能登豪雨の被害状況の視察で珠洲市に伺った。津波で流された車はまだ撤去されず、電柱も傾いたまま、地震で倒壊した家屋がそのまま残っている状況や豪雨で土砂が家の2階まで入ってきている状況、流れてきた大きな倒木がそのままにされている状況を目の当たりにし被害の大きさを改めて痛感するとともに、復旧復興の遅れを感じた。

復興住宅の一つに世界的建築家がデザインした建築型仮設住宅があり震災前に海岸沿いの地域に住んでいた144世帯が入居していると伺った。集会場も併設されており屋根には地震で壊れた家から瓦をもってきて利用されていた。建築型仮設住宅は2年間の入居終了後は災害公営住宅として希望すれば住み続けられることも可能というものだった。仮設住宅で少しでも暮らしやすい工夫がされていると感じた。

実際に被災状況を見て、珠洲市への道も凸凹であり復旧復興に携わる人たちの宿も遠い、空き家でそのままにされている家屋がある状況などを踏まえるとまだまだ時間がかかると感じた。一日も早い復旧復興を願う。

【阿部 基】

令和6年1月に発生した能登半島地震の震源地であるとともに、同年9月に発生した奥能登豪雨被害にも遭われた珠洲市の現状を確認させていただいたが、報道や写真で見たものとは違い、現場で見たものは甚大であり、被害の大きさを痛感させられた。

地震や津波で家が倒壊したものや土石流や倒木が家の中まで入っている状況が現在も残ったままであり、復興の遅れを感じたが、要因のひとつに挙げられた空き家の問題は復興の妨げとなるものであり、対策を勧めなければならないと痛感した。

また、仮設住宅においても、限られた土地で震災前の地域コミュニティを維持することの重要性を感じた。

柏崎市は中越地震、中越沖地震と、二度の地震を経験しているが、いつ何時、発生するかわからない自然災害に対して、備えを怠ることなく重視し、マンネリ化が懸念される地域防災に再度、力を入れる必要があると感じた。

高齢化社会や空き家の状況は珠洲市だけではなく、当市においても同様であり、市民の安心安全な暮らしを如何に守るかを、今後も追求するように心がける。